「日々の理科」（第 3623 号） 2024,-7,-8

「茅ヶ崎海岸の軽石（４）」

お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーション研究所

田中　千尋　Chihiro Tanaka

茅ヶ崎海岸に打ち上げられていた「硫黄島由来の軽石」は、半分以上の標本に「コケムシ」や「エボシガイ」が付着していました。

軽石はやや湿っていたし、エボシガイはつい最近まで生きていて「生」に近い状態だったので、密封した状態だと急速に腐敗して悪臭を発する恐れがあります。実際に自動車の中は、少し臭くなっていましたので、すぐに風に当てて乾燥させたいと思いました。

この日は藤沢市の中学校で、探究学習の相談会で指導に行ったので、会場の片隅の窓際に乾燥がてら「即席展示会」をしました。中学生は興味津々でしたが、それよりも理科の先生が「こんなに学校に近い海岸で、こんな貴重なものが拾えるのですか？」と非常に興味を示してくださいました。もちろん、標本のいくつかを喜んで「寄付」させていただきました。数時間風に当てただけで、水分はほぼ抜けて臭みもほとんどなくなったので助かりました。

それにしてもこんな小さな軽石が、コケムシとエボシガイで埋め尽くされています。コケムシが軽石の半面にしか見られないのは、恐らくそちら側が海面下で、付着のない黒いほうが海面上になって浮遊していたのでしょう。

エボシガイは「烏帽子貝」の意味です。「烏帽子」とは、平安時代以降、和装の男性が被った礼装用の帽子のことです。よく言い当てた和名だと思いました。

このエボシガイは「柄部」が黒いのが普通だが、今回採取したものは赤っぽい種類だった、調べてみると「カルエボシ」という種類らしいことがわかりました。

今回採取した標本は、軽石表面に「生物が付着している」ことが重要です。それはつい最近まで海面を浮遊していた決定的な証拠だからです。従って、できればこの状態で保管したいと思いました。しかし、数時間乾燥させただけで、もう柄部の根もとが剥離して、脱落しそうになっています。あまりよくない方法とは思ったのですが、まだ脱落していない完全な標本を選んで、木工用ボンドで周囲を固めて保管することにしました。今回は、いろいろと勉強になりました。